

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。



京都大学
学際融合教育研究推進センター 生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町
保津川雪景色

亀岡フィールドステーション

保津川筏復活プロジェクト 2011 「いかだにのってみよう!! in 保津川」

亀岡 FS 研究員 河原林洋

2011年9月10日、晴天に恵まれた保津川で、京筏組主催の保津川筏復活プロジェクト 2011「いかだにのってみよう!! in 保津川」が開催され、約250名の親子連れや孫を連れた年配者たちで賑わった【写真】。

2008年に始まったイベントも4回目を迎え、今回は保津川下り旧乗船場対岸の河川敷で、初めて筏の試乗会を行なった。これまでは、筏の組み方や筏流しの歴史の調査や記録といった要素が強く、必ずしも流域住民、特に筏文化を知らない世代に保津川の筏文化を認知してもらえていなかった^[1]。そこで企画したのが2008年に実施した筏の試乗会^[2]である。原点回帰である。

見学だけではなく、筏に触れ、乗って、体感しながら、保津川に親しむことに主眼をおいた。広報は、亀岡市文化資料館を通じて案内チラシを亀岡市内の全戸回覧板で配布した^[3]。チラシには子供を持つ若夫婦層に親しまれるように筏漫画のイラストを使った。その結果、文化資料館には多くの問い合わせが寄せられ、200人程度の参加者が見込まれた。

前週の台風12号による河川の増水で開催が危ぶまれたが、心配をよそに当日は、川の水位も下がり、夏日を思わせる絶好のイベント日和となった。

午前中、河原林ほか保津川下りの船士4名が3連ずつ計6連の筏を組み上げ、スタッフはテントと展示物を設営した。同志社大学プロジェクト科目の学生3名のアンケート調査、京都学園大学歴史民俗学専攻の学生20名以上が準備とイベント進行に参加するなど、今回は大学生たちが大活躍してくれた。

参加者は、受付を終えアンケートに答えた後、ライフジャケットを着用して保津川を100mほど往復した。参加者には試乗記念の京都府産材木製コースターと暑さ対策のかき氷も用意された。

試乗では、船士たちはあくまでも補助役になり、参加者が自分で筏を操れるようにした。約10分間の試乗体験であった。初めて筏を見る人も多く、筏に乗る時はみ

な恐る恐るだったが慣れてくると、棹や舵で筏を操りながら、みな思い思いに筏を体験した。流れや筏の動きに委縮していた子供たちも川に飛び込むなど、川面に楽しそうな歓声が響き渡った。

今回のイベントでは、京筏組の強みがいかに発揮された。河川の使用許可や安全管理等の手続きは南丹広域振興局が、展示物の手配やチラシ配布は文化資料館が、会場設営とイベント進行はNPOや学生たちが、筏関係は船士たちがと、それぞれが自分の得意分野を受け持ち、対等な関係で参画した。特に、学生たちが楽しみ学びながら参加してくれたことも、イベントが大成功した要因であろう。この活動が若年層へさらに広がることを期待してやまない。

川で遊ぶことをことさら危険視する昨今。かつて私たちは、自然からものごとの理(ことわり)を学んだ。川は単に危険なものではなく、さまざまな恵みを運んでくれることを。大人たちがしっかり連れ添えば、川は大なる遊びの場、学びの場となることを改めて実感させてくれた。

このイベントが、保津川に育まれた流域の歴史や文化、さらには環境を改めて考える機会となれば幸いである。保津川は、世界に誇るべき地域の宝である。



写真 いかだにのってみよう!! (京筏組提供)

イラスト入り案内チラシ

[1]ざいちのち 実践型地域研究ニューズレター no.25 参照
[2]ざいちのち 実践型地域研究中間報告書 P52 参照
[3]前回のイベントまでは京筏組のメンバーが各自配布しており、配布範囲は限定的なものであった。

「守山の家」のこと

守山 FS 高谷 好一

京都大学守山フィールドステーションのことを、地元の方々やここに通う人々は、「守山の家」と呼んでいます。実は、現在の守山市梅田町のもものは2代目で、初代は下之郷町にありました。ところで、この2代目の守山の家を、事情があつてこの3月で閉めることになりました。2012年4月からは、3代目の守山の家を探さなくてはならなくなっています。この時点で、今までの守山の家のご略歴について整理したいと思います。

初代は5年間ほどでした。当時は下之郷遺跡の復元が問題になっていました。考古学者と地元の「じいちゃんズ」が遺跡の活用やさまざまな議論に取り組んでいました。さらに、滋賀県立大学の学生たちが応援団として加わっていました。そうした人たちが集まって話せる場として作られたのが、初代の「守山の家」でした。

この初代の家にもやがて、新しい人たちが加わって、だいぶ様変わりをするようになりました。新しく加わった人たちは、3つのグループに分けることができます。「もやいネット」、市役所関係の人たち、「珠の会」の人たちです。いずれも2代目の「守山の家」になだれ込んで、今なお活動を続けています。

もやいネットというのは、「NPO法人平和環境もやいネット」のことです。この頃、このNPOが設立され、この事務局が「守山の家」に置かれることになりました。会員の中心は京都大学東南アジア研究センターのOBでした。熱帯湿地林の修復や、ジャワの伝統的土器作りの復活と技術者の育成など、様々なプロジェクトが行われています。「守山の家」はその活動を報告しあう場になったのです。

市役所との関係は当初、国交省から出向してきた宮本さんによって開かれました。同氏とその仲間たちは守山市の市街地活性化計画を進めていま

した。この人たちの間には、やがて若い企業家なども集まりました。そして守山の未来を勉強する会のようなものが作られ、その勉強会の場が「守山の家」になったのです。その後、宮本さんは「守山に骨を埋めたい」と言い出して、市長になりました。38歳の若い市長が生まれたのですが、その人を取り巻く若者達の勉強の場が「守山の家」になっているのです。

「珠の会」というのは一種の老人会です。昭和27年度膳所高校卒業生が中心となって集まった同窓会のようなものでもあります。その後、様々な学年の方が、滋賀県中から集まってくるようになりました。普段はとりとめもない話に始終していますが、なにかチャンスがあれば、もう一肌脱ぎたいという連中の集まる場です。皆、地元自治会などの古老となっている者が多く、例えば「守山の家」の集まりの中から何か事を起こそうとするときは、彼らの地域社会における信用と、その人的ネットワークが大変な力になっています。

こうしたいくつかの前走グループのいる中で、最後に現れたのが、「生存基盤」の研究グループです。このグループは前走グループの作った人的ネットワークをうまく活用しながら研究を進めてきたと、私は評価しています。「もやいネット」とはもともと同根のようなもので、親和性があり、互いに助け合ってきたように見えます。市役所とは前市長の時にMOUを結んでいます。現市長になってから、一層実質的な協力体制のもとで地域に溶け込みながら研究活動を行っています。

2代目の「守山の家」を閉じるに当たって確信していることは、この種の“場”は共同研究に際しては効果が絶大だということです。3代目は必ず開設いたします。「生存基盤」研究の活動が、実質的にここをたまり場にして継続されることを強く期待しています。

朽木フィールドステーション

「山の百姓発 ～渓流水車を訪ねて」

朽木 FS 研究員 今北哲也

朽木 FS で取り組んでいる「水のエネルギー」分野では、夏から秋にかけて、水車発電の現場研修や全国の小水力発電の動向など、視野を広げる機会にめぐまれた。7月に兵庫一か所（香美町／今北）、8月に高知四ヶ所（黒田、今北）計五か所の水車発電関連の現場を訪ねることができた。高知は四ヶ所の内三か所が水車発電で一ヶ所は風車や最近では水車にも使われている小型発電機の製作所である。高知・梶原の町営発電所以外はいずれも個人の手作りである。秋には富山での「全国小水力サミット in 黒部」（黒田、島上、今北）に参加した。身の丈のしかも様々なかたちの水力発電起こしへ、熱気溢れる二日間であった。今回は単独で訪ねた村岡の“百姓水車”にしぼって報告させてもらった。

7月初め、兵庫は美方郡香美町村岡の「矢田川フィッシングセンター」を訪ねた。5時間余りになる国道の走行から解放され、矢田川の渓谷沿いを登っていく。すぐにセンターが目に入った。柱と屋根だけの休み処から谷をのぞいてみた。岩場と淵の涼気を浴びると一気に運転の疲れがふっとんだ。

駐車場の奥には鳥やイタチなどを防ぐネットに囲まれて円形の畜養槽が並んでいる。一段高い所に水車小屋があった。主人の小林正さんに話を聞かせてもらう。



養魚・精米・発電/ 矢田川水車

「480坪（一反6畝）。何枚にもなる小町にブル入れてね、（敷地に）均すことから始めた。」事業に反対する人もいたという。水路を養魚池のために、後には個人運営の水車に利用するというそれぞれに新しい試みである。田んぼをやめる。用水を田んぼ以外に供する。さらには、本命の渓流釣り場は、よく見られる自然石を配した人工バイパス流路ではなく二級河川、矢田川の本流である。云われてみれば希有の事例である。「兵庫県公認の釣り場ですよ」と事もなげにいう。鱒の渓流釣り観光を始めた小林さんは水車を構想し、一石三鳥を巧む。

「どうして水車を考え付いたんですか?」。「13年前になるかなあ、養魚の規模を大きくしようと考えてね。稚魚7、8万匹、成魚5万、成熟して採卵する大

魚2万。それだけの魚群を畜養しようとしたら、それまでの流れ水の酸素だけでは全然間に合わんということになって。エアーポンプの類じゃ電気代が莫大で。流れのままに酸素を取り込んできた谷水に強制的にもっと酸素を送ってやる、増やしてやる方法が水車だったわけだね。100mm径のパイプで走らせた上掛水は直径2.8mの水車を回して畜養槽に落ちる。昔からの精米、製粉もくっ付けてね。6時間で玄米1とう半掲げる。」という。

製粉と云えば横回転の碾き臼が思い浮かぶ。上下運動で穀類を搗く方式は唐臼と呼ばれる。シーソーのように梃子を利用し人がガッタン、ガッタンと先端の杵を動かして穀物を調整加工する古くからの道具である。朽木でも山ノ口の御講の御供えは唐臼で粉にした餅と決まっていた。粉質が良い。

三つめの巧みが、発電である。太い回転軸の先端にはプーリーがセットされVベルトで車のダイナモへ伝達されている。発電装置は地元の電気工事屋さんが協力した。およそ500Whで、小屋の室内灯とパーベキューの照明に配られている。

木製水車は材料を選ぶ。本体の車は肥松（コエマツ）、心棒は樺、粉に搗く立て杵は檜が使われていた。「肥松を集めるのに時間掛かったなあ。あぶら（脂分）は年数経った太いマツに多いんで。そういうのは（樹の）元から二番玉くらいは採れるよ（1玉4mが2本、8mがコエマツとして使える）」遠心力と水に四六時中曝される水車には材としての粘りがあり水に強いマツは好んで使われてきた。

朽木 FS が目指してきた百姓的、くらしの森的水車の一つのかたちを見せてもらった。発電が自己目的化しない、水車の基本に振り返る事が出来るモデルである。小林さんが培ってきた山の百姓力の発表作品であるし、そこから地元の力も想像できる気がした。

ともあれ、事業の根っこを支える姿が分かりやすく、もう一度訪れてみたい現場であった。（了）



心棒先端から電気を起こす



樺の心棒/ 矢田川水車

催しのご案内

■ 第42回 定例研究会

1. 日時:平成23年1月27日(金)16:00~19:00
 2. 場所:守山FS(滋賀県守山市梅田町12-32)
 3. 最終報告書草稿の発表および検討
- *参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
担当:矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

■ 滋賀県立大学人間文化学部「人間文化セミナー」

- 題目:「自然エネルギーによるまちづくり」
講師:中越 武義氏(高知県梶原町前町長)
日時:平成24年1月20日(金)15:00~16:30
場所:滋賀県立大学 A4-108号室
一般公開セミナー、参加無料、予約は不要です。
問合せ先:滋賀県立大学 黒田 skuroda@shc.usp.ac.jp まで

「みんなで守らにゃあ、丹後の棚田」

棚田の美しさ、お米の美味しさ、わら細工の温かさ
東南アジア研究所 中村均司

11月23日(祝)、大型商業施設「イオンモール京都店」(京都駅八条口南西側)で、京都丹後地域の棚田の美しさや役割などをアピールする催しが開催されました。これは、「丹後棚田研究会」が、都市部の人たちに、①丹後の棚田を見ていただき、②そこで生産される美味しいお米をあげ、③農村文化に触れていただくことを目的に開催したもので、約300人の来場者でにぎわいました。

大型商業施設3階の中央付近に出現した秋の稲刈り風景。稲木にかけられた稲束と、並べられた草履、雪靴、蓑、筵などのわら製品。若者や子供たちも足を止めて注目し、周りの店舗にも溶け込んでいるところに伝統的な農村風景の「新しさ」が感じられました。

パネル展示では、丹後の美しい棚田風景や農作業の様子はじめ、棚田の役割と機能、棚田を守る都市の人々との協同、学生たちの棚田・農村での活動、「丹後・食の王国」プロジェクト紹介が展示されました。棚田米の試食と米の配布では、丹後の5地区の棚田米が来場者に提供され、各地区から棚田での農作業の様子やお米のおいしさの理由について、分かりやすく説明されました。わら細工の体験コーナーでは、伊根町の

大江勇治郎さん(87歳・京都府農山漁村伝承優秀技能認定者)の指導で、お正月用のしめ縄作りに、30人がチャレンジしました。以下は当日のアンケートの回答(198人)からです。

来場者は30歳代と40代が最も多く、次いで60代・50代・20代10代未満・10代の順で、家族連れやグループも目立ちました。来場者の棚田についての認知度は、「よく知っている」25%、「何となく知っている」



写真1 筵の上で、わら細工(しめ縄作り)

34%、「聞いたことがある」19%、「知らない」21%で、約8割の人が棚田を知っていました。棚田のイメージでは(複数回答可)、「農村の原風景」71%、「懐かしさ」28%、「心をいやしてくれる」30%、「食糧生産の場」12%、「災害防止」16%であり、棚田の文化的・景観的価値のイメージが高いことが注目されます。

棚田保全については、「以前から思っていたがあらためて痛感」40%、「大切なことと思うようになった」38%、「理解したがどうすれば良いか分からない」19%、「特に大切と思わない」2%であり、保全へのボランティア活動などについては、「積極的に参加」15%、「機会があれば参加」75%、「参加する気はない」8%と多くの人が、何らかの形で参加したいと答えています。試食した棚田米について、「美味しい」89%、「普段と変わらない」3%、「美味しくない」1%でした。ボランティアの方々の米の炊き方も見事でした。

丹後棚田研究会は平成22年10月、「未来へ継承していくため丹後の棚田の営農と保全管理のあり方」を研究し、農家・地域住民・都市住民などがともに考え・学び・作業することを通じて、交流・連携を図ることを目的に設立されました。これまでは、丹後地域でフォーラムを開催したり、棚田地区の実態調査などを行ってきました。

都市部でのイベント開催は初めての試みであり、集落からの参加や運営スタッフの確保が心配されました。しかし、当日は早朝から、地元の棚田で収穫されたコメを携えて5地区から参加がありました。後日、来場者から米の注文もあったようです。一方、京都市内を中心に10人近くの学生・市民の方々がボランティア・スタッフとして協力し、このイベントの運営を支えました。

棚田はもちろん、農村地域や文化に関する都市住民の関心の高まりと、都市・農村双方の新たなパワーが感じられた一日になりました。



写真2 大学生による棚田の復活・保全(袖志棚田プロジェクト)